諸流浮世風呂四編

地

国立国語研究所
28093
図書館

中村文庫

諢話浮世風呂第四編巻之中

江戸戯作者　式亭三馬　戯編

男湯之巻

●ねきあげうる髪結ふる男を頼みて髪を本田ふうに結ふる婦人　ほそ〳〵と遊暇なり　鼓八▲今朝のしまつに放湯のさせられようとおもふ〳〵。

「ヤレ〳〵あるのこゝをモシ。衰微さんでござりませんう」「ホウ計鼓八ゑう」「ヤレ〳〵別まぶこの」「モシまあ。どうぞ。

湯〳〵。まるのるでござりまするよう。私も先刻うふんでも衰微さえ

ござりたれども。此あと思案

設すゝきそのもそのぜおらァ昔の俤もなゝ當村おあそぶひと
きそのぜふ誰がをゝ爺くので様なゝ老實き
「やゝそもそもきそのぜふ公の爺ゝ様ゝをきゝ公の爺ゝ様ゝをきゝぶりで
トキニまあ。おるだゞりばなそをりまた。あるゝゝ一順浦賀の方へ
「ソコデ。どんけ本家の方へ」ゝと一時半立飯りの「お徐
ぶ。おゝゝゝァおゝ意源居「ゝ驚春で爺人ま。
ホニ乃新造さんぞ「ゝそのぜおらァ昔の俤もなゝ當村おあそぶひと
ゝゝシテあるこゞ左遷の爺ゝ乃新造さん

どうなとこの
秘人うこ「やっぱ
ぎぼ
ろこのき「と
うまっぴどうもなうふ秘
人「女房を尼将軍の差図で里へ
る
おうのきうに。おあくさうの金をほうって。逃げ
ごしん
たぶらま「これ家うふ一切まうるひで。
ろきの
小僧を入れ「下女下男
こぞう
ふうふ
為送りのおあくさんぞうの小ぼう
わう
ごごめん
ハテ結構なお月らぢ。モシ衰微さん社月日の下でお生
らうまい
れなもそうこ子。

其上にほゞ不足うや欲も頂きぞ。ハヽヽ「コウ是非もない同じことぶぜんと我つそも久しきなりぬう子。ハヽヽ実もうモシ。ハイ

なり降るとふぷコデ客人（きゃくじん）もかどぐちから
まア。こんなふるのに已（やめ）て帰（かえ）るのぷ方（ぞんだ）もなくて
くと。そこへ女（おんな）ひとりくぷ方（ぞんだ）もなくて
やうなはなしぷとろくぷぷとろくなまとこ
せんなえ。ちよつとお待（まち）遠（どお）の百足（ぢぎ）ぷあるの
おりる面白（おもしろ）ーで。サアと乗（のり）ーとりんでおぢ
でもあると。まア身上（しんしやう）の足（あし）ふせうと思（おも）ふまでもなく
なー子（こ）へ。よくもとりんでござせ

きつと潮来を廻へとろ廻り潮来ぶし
を好ぶのとおなじやうどぜ人まで
客人ごとに自慢でござんす。こゝ弦ひきの三
人そろつて哥妓や幇間高で見物ぺ〳〵。おめさんの芸
ぜん
穿里さんの花るお客ちやア。骨ぐを折ると。ハテ。おつ
そろしくなりまん。イヤ野幇間のでくと
やとそれど。幇間でも動ねろの難うもがぜ
きのまんぢうめん
一饅頭蕎麦や。砂糖坊主どうじ
の一ト間ひさしく逢ませんモシ

きんせうぐわん
金勢丸
一包百文
半包五十文
酒の酔を
さまし
よくのほめ
りうくのの
どくけし
まつけ
そふ二日の
物せ
外諸症の
秘あり
別して
溜妻ふ
ちがひあり
そくく
即効ある
奇薬ゝ
本町二丁目
三馬製

そのび
寝微さん。おあくさん一枚を大勢のとりまき。よあくまで通夜大飯とふ洒落が。
たび
夜ぐごぜまつたらけ子「奉者ひさしくふざとさ。今ぢやア
て
すも出ねへ程迚ト汲ゆきこんせうぐわん
ゝ
宅が痛うなつたぶ。ふ図此酒やぶ目ふ付まして汗とりふ這入ゆと
とゝなまくたぶ。ふ図此酒やぶ目ふ付まして汗とりふ這入ゆと
「宅でのふもの縁ぢ」「悪縁横町ぢ。酒を相かふ
移ぐすおくぶ内へ歩び程人歩ふ此横町ぢ。酒を相かふ
ぶらふ此ぶりでおひさしぶりでありがとふ。へ立ト

横町(よこちょう)ぐるぐる人(ひと)まわし。ハテ子。不思議(ふしぎ)だえ。エ。エ。おやえ。
変化(へんげ)の忍返(しのびがえ)し。清地仕入(きよじしいれ)の松(まつ)が多々一本外(たたいっぽんはず)も何(なん)もなし。掃庭(はきにわ)。
ことえ通(とお)ったら。平屋(ひらや)ぐ後(うしろ)が櫓造(やぐらづく)り。成程(なるほど)。これえ製作(こしらえ)が別(べつ)ぐと名(な)は上(うえ)と。
如来(にょらい)おあくさんの家(うち)が泥酔(でろよい)ぐ宅(うち)ぐ「ホイ大(おお)丸(まる)な早(はや)
まり降(ふ)った子(こ)「あらぶぶぶき」「此(この)人(ひと)どもまあふぶぶき」「お松(まつ)
とふ女(おなご)も来(き)ふぶぶき」「三十人(さんじゅうにん)揃(そろ)の浴衣(ゆかた)を
頂戴(ちょうだい)ぐ。猿廻(さるまわ)し向(むこう)も「そんそん」と絹(きぬ)かけ「そんそん」あの
も有(あ)ったえけの。今(いま)あの時(とき)を尚古(しょうこ)ぐ小舟(こぶね)で追(お)っ来(き)ること

時分の江戸鯨舎へ子の二三人も持て出る婆となりほしてぜきろの
りんどう。これ是をて鼓ハるども思ひ菊りをと「宮もう一世一代といふ程
かの「イエどうも。まごひごろう。イヤモシ攫私でお供
大勢で仕退の料理が私ごぜくは「子「各そろく肉が奇絶ぶの
おもせいのき　わりよう　そのおの
「アノクレ巻中秀逸とふ句。平庵さんの案ず。白玉餅の油揚
「と「ソレ。揚鍋ゟ油の弥ぐつと沸ろ〳〵の案ずで。白玉の揚出
さ子「そのと　あげなべ　あぶら　いよ　でとおり　きまう
ちやてそ。おのこを大根卸で奇妙。ト出まず肴子。錫鉢のこの物ぶ有ゟ白ぶを
をひのこん　ひきまぜ　あげなべ　うつ　そぐだち　そのもの　あり
吸物椀へ〳〵上〳〵。ト。揚鍋の中へ入れるとそ称ぶ。やそのもの。

名ゆーおふ氷鉢の白玉ぞろ。これ
よりの侍一人もなー。まづ一番ふ
白玉どのをこえるト。言ひ
入ふらめんぞ。一面よどろ〳〵しこ
モウ。腹ぐ助ぐどぜんはこイエ
ごぜんまつたよ「それ」今ぢや
ばろりさ。アまつて両国ふ施餓鬼船
衰微さんどうもそふ極人「イ
やそんふ跡月乗く

かとろけ
つみ
着さんせ
あつき一服
えんせい
丹精そ
えん
園と坪で
ゆく
ちゃん
茶碗を貰
うち
堀の内さ
をきあがさ
苍屋敷哭ス。
やね
屋根舟で出
てぶま
寺島の
きくおう
鞠宇和尚
いち
が庵へ
でぶ
倚ました
この
庭も大
しき
分よくな
そのそこ
園とよく
しもと。
四季とり
ふ景物
ちゃん
ぐ
茶碗中
ものも
梅の輪で
ささぐ
外ふ
いとぞこ
居底の中
こえん
梅屋菊塢
ものお
銘ぐこぜ
ものも
梅の納
ぶぐ
筆とい
ふ字行
ちゃん
ぐ
茶碗を貰
ものも
梅の輪で
外ふ
ささぐ
隅田河

ある所(ところ)でござる子(こ)「大明宣化年製(たいみんせんくわねんせい)のでござる。此(この)七草考(ななくさかんがへ)と云(いふ)ものを持(もち)て来(き)て呉(くれ)ました。何(なに)う珍(めづ)らしい物(もの)でござりませう。ちと拝見(はいけん)致(いた)しませう」十二。

おそふく流行物(はやりもの)の様(やう)な私(わたくし)どもの筆(ふで)でおのぞみまでもござりませんが。どんな筆(ふで)でござりまするか。まづ時(とき)候(こう)の挨拶(あいさつ)から書(かい)て見(み)ませう。

それぢやア秋(あき)の七草(ななくさ)の考(かんが)へ方(かた)を書(かき)ませう。

のんでむ(ママ)ござりまするか。

「秋(あき)もモシ。唐土(もろこし)の詩人(しじん)の秋(あき)を悲(かなし)むと雖(いへど)も。我(わが)朝(てう)にては秋(あき)の七草(ななくさ)を賞(しやう)し。

とりわけ秋(あき)の七草(ななくさ)の考(かんが)へ方(かた)も。その人(ひと)によりて異説(いせつ)区々(まちまち)なり。甚(はなはだ)しきは梅屋(うめや)の横(よこ)チヨを通(とほ)り。トキ三ツ。

上りやせう」と勿論「くろうと
「モシ〳〵。ねえさん。ねえさん。ねえさんとも。おくさん。
ねえさんぢ
ねえさんぢ
沖鉋ぢ。其の外俳諧と庭のぞき
ねえさんぢ
ねえさんぢ
ねえさんぢ

こうぞう様ぢでもなきれぶらい「おもちゃ」を百年ふるるもらん。牛睡おきる朝寝ちもる虎ぢ月日を寝て消とさらい帳合して五十年の。

早起こく逢寝れば五十年ふさろいでも七十五年活る。

のびやう百年の割ふなふいでも欲慾くく浮世ぢやさろい。又あれん。

滝ろ別のろちや番頭きんもまえ頼で金くるもがあれら。

やしろ飯食ど。きろの著物奢ふだ。所帯のろふなる女ふそあるまろ。

私が寝ふ持とい。其代ろろたで紙代として。銭五百づ屑こ

や
きるらいる。ナニト生来きうる相談ちやぐる有たら世話ちやがんせやモ
ひとりの
獨まもろくく。ニアんなんせや朝ニア起るら。社から宿這入ちて六十日そこらぢやらいまぐニア宿
お目えがあると殿さのおもがお
うふ手桶を下て。井戸なそえお出がめるぢや。芽ふの汲でまて
なう。教ふ片掌へあを洗そこしくとお顔の摘洗ぢや。掛手ぬぐひを
ぢやによそて。手巾と雑巾と名遠て。新拭ふがうんぐも有ぢや。
きこる「そ」れふ扇て引窓明るらいまぐ星明るふ社がな。
陣そえんせ。引窓ふ障子がないさろい傘を。まであさと上え方

かく窓口(まどぐち)へ突(つき)出(だ)すのだ。トットト下(した)へ。芝居(しばゐ)で云(いふ)のを聞(きゝ)齧(かじ)つて居(ゐ)ます。まづ火鉢(ひばち)を一(ひと)つ。ちやがま茶釜も買(かう)ねばならぬ。天窓(あたま)も地(ぢ)も一(ひと)つに成(なる)。ちやどんも買(かう)ねばならぬ。古鍋(ふるなべ)ひとつを頼(たの)とする。ちやわんも買(かう)ねばならぬ。土瓶(どびん)ぐらゐ揃(そろ)へて置(おく)のも利(り)口(こう)。一日(いちにち)さんざの余(あま)り汁(じる)ぢやとりや好(すき)ぢやけどナ。勿論(もちろん)番茶(ばんちや)だけの味(あじ)ぢやわいや。又(また)向(むこう)から迎(むかへ)獨身(ひとりみ)だけの雪盆(ゆきだらい)を一(ひと)つ。又(また)方(かた)と迎(むかへ)獨身(ひとりみ)だけの雪盆(ゆきだらい)へ落(おと)す附(つけ)て仕舞(しまう)のぢやよふそおけの代(だい)は飯(めし)の味噌(みそ)を擂(すり)こ白湯(さゆ)を呑(のん)そふの申(もう)で社加減(しやかげん)のお汁(つゆ)ふうの物(もの)。そのまゝ「ヤア焚(たき)こ分(ぶん)の焚(たき)もせの跡(あと)を取(とり)そこぞ術(すべ)のさう

そのまゝそろ〳〵其の侭放ておきて、ツイト向ぢやへ廻り、表の戸つてうら〳〵。ちらのぞいて見ると、爺さん婆さんころ〳〵。ゆかりのものゝ多いのか。パイ呉ふ今宵もまうけやな。爺さん婆さんころ〳〵。言て呉る事もなかりけり。此又謎を預て置と云ふ。ハテ此又謎を預るとは。ふしぎ〳〵。ト思ひながら。まゝまぐら。うらのなぎやふ。ト云を指きゝて。裏借屋へ廻り。ふすまのうらのめんぼに。桃ふぶ五つ。ぶどう。ト云ふ謎であるふ。西瓜の安売こゝに三十八文。でも生〳〵。そんなもんなら。そんなもんなら。そんなもんなら

向の家や、
ようさつつみ
私を付そこれるぞ。や茄子田楽が出まするの。或をまつこ蛤焚こ
とつそ平血に一だいぶつぶつ一体豆腐が大きな
ぢや。けどナ。小半挺買さらぬや迚。
まく 食ふが役ぢやまのを。焼豆腐一ツ買て服て愈てみる
ちひの 食物ぢそ。芋幼とふふふ。汁粉ぢやまのを。
有さふ。世話そくぜんせ。
物るぞ茄子を言語のそべ

物ものがたりの荒うきこえるや。可愛らしいにつきして硝子
の障子の外より招ぐときろ。一見赤で碌な
家ろくのものにあらず。獨者の僕こしく家初なれば其報もおりやせ
ぬ。ちいさき声を上ろしバーテンドルや因〳〵行〳〵昼飯の支度をと
せろくのやをりやや。イ。コリヤ〳〵八百物をさん。
くちよまて待てくんせ。トよびもどしてそんなことをいふと荷の申れ
ぬのでおまへ方へバアさろうかの。ハテ何をまよふ
ぬるやアめるく鴨肉ろうたろう。

ハテめうな
物ぢや
めうに
往ござる
買ねばの
ヨウト
皆まで
ござらう
ハテ
ござる
アイ
ござる

どの事ぞ
まの色の丸い物で白う
がんぴうぢやの
云ござる
義物を
徳ぢや
今
其内の一種を
生姜よ
ござらう
ござる
ござる
生姜ぢや
生姜ぢや
生姜を買ふぶら
ござる
ござる
ござる

ちやア生姜を生

みそうめんあさげ後人を生姜よもやまと「又いろの「アイ。わて上

母と子「ヲイト待う待なされや。斯ぢやによつて待てござんせや。

ト青物の荷をきやうくんまやそこ青物

そーろのきのふ高くぜきやうア。大束ござるんふ。此下ふ小束もありまと。吐るおあ

大束ござるんふ。此下ふ小束もありまと。吐るおあ

どれ撰ござア

敷ふきやうそこ「イセ。まあ生姜ハ壱そこ「白瓜ハどうござる

唐茄子十六大角豆。冬瓜九漬瓜。柚茗荷。青葉蕃椒。その外

又そのほうる通りござたんと買てくんせ「ヲイト

いろくそろへ待屋てござんせ「もうこまんを

よ
ものの
のごす　はち　イヤ　ちょっと　まち　くれ　まち　なんざ
食ね喰ものゝ　まち　おまちやれ　何で待る

○江戸者の商人の言とるどく。上方者の買人と取遠さうなり
えどもの　あきうど　こと　くだ　かみがた　もの　かひて　とりとほ
物ぢやな。能加減に正札で買ふがよい。商人「そりやア
ものぢやな　よ　かげん　しやうふだ　かふ　しやうにん
誰が叱らうぞい。せん共の
だれ　しから
まねせず
真ッ直に
まつすぐ
商人が秤と算盤で買ふぞ。
あきうど　はかり　そろばん　かふ

さん。其(その)そんなら物(もの)ぢやうこい。ハテ氣(きの)毒(どく)ぢやの。おりやう能(よう)へ。何(なに)ごとぞ。當地(たうち)に順(じゅん)じて稼(かせ)も止(とま)る。枚又(まいまた)筆盤(ふでばん)も亜切(あぎれ)ものやうなん。其(その)能(よう)へ。おゝ亜切(あぎれ)ものぢやの。そりやア。是(これ)も亜切(あぎれ)ものぢやの。そりやア。此(この)唐茄子(たうなす)も

三十五文とふろうのぞ商そんならまけるぶんよ
又縮緬本ぞありそがふろうきろう
早ぐ買附られ候へ四ツ目へ往て
ぐく
取もる方の相場を。知ぢやろうぞ。
トぞ。ヲ八文「のもらうぞけちそうな」
ひろこらる「其花ぶ
ようろそトぞ。ヲ八文「のもらうぞけちそうな」
付れぢやあるまいの。四ツ目へ往くふんせ「ヘシあまれるふア。
ぐんよせ。八文ゆうんナ「買うほんならまけるぶんよせ。八文ゆうんナ「買うほんならまけるぶんよせ。八文ゆうんナ「買うほんならまけるぶ

いっぺんまうけ遣うも後へ「トかうぞ
まァ相談ぢめあるゆこれまで買るろ「それまで買るろ「ハイヤサ。そこが
どこまうけ遣うも後へ「トかうぞ
ゆく
まァ相談ぢめあるゆこれまで買るろ「それまで買るろ「ハイヤサ。そこが
ぢやないかいもちろん勘弁ぢめるもやぞやもちろん勘弁ぢめるもやぞや。もち

遊今行る。ア
ぢやらの。千丈よそうえんせ「チョッおまち
坊ふとる母うだ。まろうやせん「ハテそこ
ゆとせう。もまんぶ叱られてチイくまんぢやけど。ヲ何のコレ。清みの
弁慶堂うろうろ。十三文の「まんぢやちやん「ぐっとチョッ。ヲ
生れ。サどうぞ「ホウ川。ヤ。まろうろ
トそうぐふ彩のまをはて「チョッまみやせう「ヤまろうろ
ろうそ高の物者貢のぢやらせの
高「ぢやもの。千丈よそうえんせ「チョッおまち短気
かけく ユレめ
ひふ
坊ふとる母うだ。まろうやせん「ハテそこ
ぶっとの
弁慶堂うろうろ。十三文の「まんぢやちやん「ぐっとチョッ。ヲ
生れ。サどうぞ「ホウ川。ヤ。まろうろ
トそうぐふ彩のまをはて「チョッまみやせう「ヤまろうろ
ろうそ高の物者貢のぢやらせの
高「ぢやもの。千丈よそうえんせ「チョッおまち短気
かけく ユレめ
ひふ

よふるせんもりの貴様人「サテ仕合せの高い物皆買ふて行ふ」
六ツ半分居るうふ。初ふ頭をサ八文まで貴様くきやア。
あらこが様人是ぞれどもこれをおあくらう。此等すが落ぢられ
高ぐ三文ぐらう。世界話ま貴ふ
家もう辺ア。あんまうるせへうふ
三文本が切れもやおろぢ様人「そりやおあ本が国羅で
ちやたらの切らやナ。何ぞ買て入合せをせうふの此旅子
をる「高白後生ぐうふ離そふ様人商人うふ貴ふて入けまで。

おくふかく居ると外の商をみ積ふ「是くきうりは
玉瀧でも貰ふといやせうがシテ
割ふじゃ。
商「サアそんつふ下さらふ這ふ
いろんなもの。なんぼ「商「漬の方ふ「イヤ〳〵焚のぢや「商「焚ふ
サア〳〵生姜子なら是がいく「商「漬るぢやならとらふ
「生姜子とらふもの。「商「江戸で煮て食ふと云ふ
「漬るぢやなら「商「生姜子とらふもの。「商「うんでもらふ。

早く梅ちやんを往かせ。これが三十五文ぢや。おまへ
五文が好だらや。高そりやア三十五文ぢやを。甚代十
直ぢやアねへか。高そりやア唐茄子で三十五文ぢやを。甚代十
きうの漬ものに高掛直をとりやせん。早く早く。昼
損ちやアへト先叱るの。高叱るもの。
あの人達かゝる屋ちやア日が暮
商ちやうひまきの。高へ儲なら拵せのとうふ屋ちやのう。高へ
でも有うぞ。不審のくそたれ馬鹿

どうもうるさくてならないわ。物見遊山の慰物にも後ぜんの。
うるさい貴様ぢゃ。
同志の集会を取ぐ久和人。虫をさらさら居るわれと。足が又。地震
今ぢゃ打ち壊くのんぞそのまぎれぞかんとうの。
どちらも。
其後言ふも社加藏かたくなアねざれど。
此方ゆゑ相應ふ蔭神さま有アトかをきの赤ゆそ
一ツ
女の旅の道連世の情ぢゃ。
一株の蔭。
他生の縁で有まろう。

おまんぢゃ。ハテ。賣るも買ふもどなたも御生の緩やかに
ござんす。我等すぢやそんぢやない。お伊勢さん
ぢやもの。ちとも嘘はいはぬ。そくばくの
茄子の十も。多分にぶんをうりやげられても大きにまけ
ておくれやのう。ハテ。どれ頭をまけませう。是非
でもなの買て上るさふぞ。買てく上るさふぞ。相談
物うもござんせん。先よまあそこく垂ヂャ「サテ
さうぢのまだやなる商人も「サテそれ
せんさくぢやなる「コリヤ軍配とふりんぢや「高
けち「三十五文ふ買ふやうろき「まあ
ふ現銀うけ給まへ「サテそれ
三十五文

ぢや買(うひ)それ三十五文ぢやまけ
ろよ。トいふ時(とき)や何(なん)でもない
物(もの)を高(たか)く言(いふ)ことをつけ値(ね)
をつけぞや。ヤア待(まて)んせ。トいふ
を聴(きい)ては居(を)られぬ。ヲイ傳(でんざう)公(こう)どうぐ
ヲイ勝(かつ)んべのもぢい。賣(うる)のは
聴(きい)ての上(うへ)乾魚(ほしうを)を賣(うる)ナイ(物)のち後(あと)。
ハテ百屋(やおや)声(こえ)が高(たか)い。先刻(さつき)
から聴(きい)ては居(を)るが。無躾(ぶしつけ)ぢや
ぞ。此(この)ぢゞ猿(ましら)ぢやナ(猿)。虚(うそ)ア猿(ましら)
ぢやぞ。ヲヲ(傍)そうも猿(ましら)(傍)ぢやぞ
ある(傍)ぢやぞある(傍)。ヲヲ(傍)合(あは)せるア。
ヘシらくそぢや(傍)ぢやぞある(傍)。勝(かつ)
ヲヲ(傍)ちと乾魚(ほしうを)を賣(うる)居(を)るやうぢや

納(おさま)ると悪(わる)い事(こと)は出来(できま)せん。
こゝに一人(ひとり)の魚賣(うおうり)ありて居(を)るに四日市(よつかいち)まで
聽(きこ)えし。一時日(いちじにち)へ鰯(いわし)が頭(あたま)でござり
ませう。一文(いちもん)落(おと)行(ゆ)て呉(くれ)ろ。
五貫目(ごくわんめ)の字(じ)後(あと)よまれぬ。
文盲(もんまう)
一寸(ちよつと)の間(あひだ)に合(あは)ぬ程(ほど)打(うち)ならうとも
知(しら)ぬ。甚(はなは)だ生(なま)くさい。
後(あと)ちがひの
一寸(ちよつと)下物(さかな)も後(あと)の一盃(いつぱい)
文盲(もんまう)
買(かひ)有(あり)ながら秘(ひそ)かに魚(うを)を一(ひと)つ
買(かひ)ました。
付(つけ)ぬ

だアスは（他）通り本ッそ毎りの痒み（もぐ）先う（ざ）洟をと出さ（ど）程と絶人（他）徒ぶ。かまうぶど行ッし。百性（ひゃくしょう）ぶ（他）コレ（他）お百姓ろ。ホイ、ちょくと（他）行ッて（他）乾魚（ひもの）やせう（けう）ハハう（ふう）往（い）てまやせう（けう）ハハう（ふう）商人（あきんど）ぶ（他）そんなもの（他）アイ。トさうるとそのふところをおきるあ（他）そんなもの（他）魚屋さん。その乾魚（ひもの）（他）そんぢ（他）程とるぞ（他）そのハ（他）そんぢゃ（他）ようござる。コウ（他）仕（つかまつ）ると絶人（他）ぜ。めらの乾魚（ひもの）更（さら）筆す。一生（しょう）立（たて）ても食（くら）ぬ。

立衆「ゆでよんぞその乾魚なくらへ
ぢいとえちよ。其外之役てんく人
のるさ「なんが強ても洲の咬んく
商人ぢや「えんる間遠ぢ。せんく
ぺくと待とさうの。直切てもよいトツト
ねぎ
亜切くんぞや。江戸子の物買ふなら
えんぞれ大風ぬ買と丁度がよ
半分直「いくらぢや「半ら亜ぢや。
ナシト江戸子ぬ素見ぢやうぢ。何のこ

うるいおきやうもねえ。
あんまりがさつ過ぎる
ニアわんまうもうだ。
ちとナア。サテ〳〵
ぢうふくそうだ。
実正明白也とつゝまぬ
できの生まれつき小便ウ
なんぢや 高 百も等へようう子二言
ヤアトびうり 高 五十ウエ 上。トひやう

ト買ふもそうだ。
もうる所をひやかしの「下まけろ。ヤアく。ヤアく。そりや
実正。テモさうでも亜米利加。えどこ
亜ふるとんとん紙が。江戸子
イヤ待よ。まそ
ハア情ないもちやナア。
もうりびけ
七割引ぢや 高 たまく
ね
亜ぶ
んしん
君ニ言

其の根本を買ふてどうせうぞ。駒迎ぢゃ。ろんのう。山茄子ぢゃ。此茄子ぢゃ。ろんのう。山茄子ぢゃ。種かなう。「コレく」私が参て本所茄子持まするとて種へあれど焚て食らふ山よりも自由なうんぢやナア「ハテ安の物ぢゃ。ろんのう。山のほせうめんな。「サヽそんならば私ゆも其のさ。ニテ

商人あきんど

五文の三文半で十七文半とうるナ。ろ「ハテ三の後ぢやまろのに。ト。三十五文の十五ぢゃ。ろ「ヲヽ其ぢゃ。ト申まするとて。ろんで其ぢゃ。ト申まするとて。ろんでなされ

商人「あきれ二ツヱ「ヲイノ「たらこ二
りんうちナ。人を馬鹿まった「二ツぢや迚賣ふれんとぶ
ぢやなー。八百屋さんぢやるのかい。トット「ろくんお方の
二ツヤ二ツハ八百屋へ行て買給へ。「六貫文もちやア「おます魚屋
方うふ貰ふ。其代ひとつ改うふ。其改うふ。其代ひとつ改うふ。其代ひとつ改うふ。其代ひとつ

おのて金行くとのさうに無沙汰
まいサアア其中でき重うりと。目方のありきうる
ヲ。ヲ。行ちやいらりん
よまけ紙へ。やこりや其方のと替ておくれ。ヲットよう
紙うる為ぢやまうこナア。まくく折く毒消るもの
ろいしやうね
一体の疝根へ来るも方ぢや。併トツト江戸のお方へ
サアぜひ強ふ
御ござりや四文ばきで四ぢ
六文。二三四。ありや四文よ。今のぶニッで三文五ト
きまり紙うナ。唐茄子が十三
半紙

もろもろ綯合ふと乞海もあるまい。
うのうのい。スりやアー
これてこや是天地自然の損徳も互も五分五分のそろばんづく。
ぎゃうじゃうぎゃうじゃう行司頭りやアしねえ。ナントもふ
よ　まみ
綯う負きんこアい。ユルく海を改めるまれや。ひょろと吉海が矣
ろうざ
く。堀平くらふおや人の耳ぶり。錆られども破損ねえ
ト海をとりやアしねえぞくくのさへ。
それで
是程とそろばんづくのよ。ヤユルく其そ程の腐ふ

商「これ見ろ。この物を乾かすのさ。それ。舞茸とろのふの
物を乾かすのさ。もりや？何茸とろのふの裁の
茸ぢまあろうものさ。浅が出さ
茸ぢまあろうものさ。もりや？何茸とろのふの裁の
物を乾かすのさ。それ。舞茸とろのふの

まもらふ
弟首を貰て帰るから
やう
ふそ
ゆう
そこる柚ると一ッ貰
ま
て行んせ
きうそくをとる
早速吸口と仕るぢや
高
「あきの
ろうどうよ
八百屋さんぷでもおぐんでるらるる。ハ
まみ
ん玉の。外う負てう
だいどころ
ゐ
ぢ
ぢ
ぢ

貰ふぞな。もし。宇治拾遺をそのまゝ
もつて。其外の昔本に。よく書記す
くねる物ぢやどうぞ試
くねる。此ミア茹子を拵へて。其残つた汁へ
吸物をこと〳〵。私が食ふと人がある。ヲット。うまい〳〵。
「ヤもつ〳〵ハイさやうならば。

おろしやよくのる薬

五十文 三十二文

江戸の名

百文 六十四文

百五十文 九十六文

此外諸国名産数多有之候間略ス

本町 中ノ二十一 馬右

28093

国立国語研究所
1001952264

9
34
2